提題の「ってば」「ったら」
－「珠美ったら、無茶言わないでよ」－

三枝　令子

要旨

「と言う」の条件形「と言えば」「と言ったら」の縮約形「ってば」「ったら」は、「って」と同じく、直接話法の用法に始まり、提題助詞、終助詞の働きも併せ持つ。本稿では特にその提題助詞の用法に焦点を当て論じた。

一口に主題化と言っても、前の発話からあることがらを選んで新たな話題を差し出す働き、定義付けや説明、そして単に主題をことあげする働きと、主に前に来る語の性質によって主題化の働きが変化する。また、「ってば」「ったら」は、引用の形態を含む点で「は」「なら」と異なり、一方、条件形である点で「なら」と共通するところがある。

キーワード　提題助詞、って、ったら、ってば

1　「言う」の条件形から提題助詞へ

1．1　「言う」の条件形とその慣用表現

話し言葉でもっぱら用いられる表現に、

(1)　克己ってば、すごく不機嫌な顔してる。（会えて）

(2)　「珠美ったら、無茶言わないでよ」と夕里子がたしなめた。（三姉妹）

といった「ってば」「ったら」を用いた表現がある。この表現形式のもともとの形は、「と言えば」「と言ったら」という、発話動詞「言う」の条件形である。

(3)　すぐ戻る｛と言って／って｝出かけた。

(4)　彼が行く｛と言えば／？ってば｝私も行く。

(5)　私が行く｛と言ったら／ったら｝行くか。

用例(3)-(5)が冒頭にあげた用例と異なるところは、「と」が引用の働きを持ち、「と」の前に陳述文が来ている点である。いわゆる直接話法の用法にあたる。この場合、条件「ば」「たら」の用法の差を反映して、「ってば」と「ったら」の用法も多少異なる。すなわち、「ば」は仮定性の強い条件のため、後件には意志・命令表現が現れにくく、一方、「たら」には「ば」にはない時間的継起関係があって仮定性が弱いため、後件の制約が少ない。次の用例(6)のように、時間的継起関係があり命令文が後件に来る場合は、「たら」は成立するが、「ば」は成立しにくい。

(6)a *俺が来い｛と言えば／ってば｝来い。

b　俺が来い｛と言ったら／ったら｝来い。

集めた用例を見る限り、「ってば」は、文末に使われることが多く、文中では、先の用例(1)のように人名につくのが普通だ。

「引用」の機能を残しながら固定化・慣用化した表現に次のようなものがある。

(7) いらないったらいらないんだよ！（蛇蠍）

(8) おめえにゃあ明日があるんだ、寝ろったら寝ろよ（さぶ）

(9) カレーったらカレーだ。

(10) でも美味い物食べ歩きするには、足りないって言えば足りない。（病理）

この用法は、次に見るように「ったら」と「ってば」で明らかな意味の違いがある。

(11) a うるさいったらうるさい。

b うるさいってばうるさい。

(12) a ？ひまったらひまだ。

b ひまってばひまだ。

「ったら」の場合は、「～と言ったら本当に～だ」と、言いたいことを強めるために同じ表現を繰り返している。「ってば」は、「～と言えば～と言えないこともない」とむしろ発話の内容を弱めている。ただ、いずれも話し言葉で用いられるものだから、陳述性のある表現が「ってば」の前に来るときは、イントネーション等で「ったら」と同様の強めの意味にすることもできる。

(13) いらないってばいらないんだ！

「ったら」の後ろに、同じ表現の繰り返しではなく、「ない」形が来る場合もある。これも、「ほかにはないほど～だ」という意味で、同じ表現を繰り返す場合と同じ効果を持つ。

(14) それで、その喜びようったらないんだよ。（梅安）

(15) その教え方の厳しさったらなかった。（日経）

(16) 暗くなった機内で映画を見ながら一人それを食べる快感ったらない。（朝日）

(17) なんでわかったの？人が悪いったらありゃしない。（龍）

この慣用表現の後件がなく「ったら」「ってば」で文が終わると、終助詞的な機能を持つ。それについては４節でみる。

「って」「と言えば／ってば」「と言ったら／ったら」の前に来る表現形式は、文だけでなく、次の例のように体言のこともある。

(18) a そう簡単にあきらめないと思うな、あたしは

b ・・・・・。

a 女って そういうもんよ（蛇蠍）

(19)「・・・白猫じゃ悪いことがあるのかな」と片山はまだ痛む頭をさすりながら言ってから、「そうだ、白い猫って言えば・・・」と、ふと思い付いたように言いかけた（三毛）

(20) そうなんだよなあ。ＯＬって言えば世間様は一くくりにするけど、けっこう先差万別。（朝日）

(21) 本当にこの頃の教師ったら、不真面目でいやになるよ。ちっとも教える意欲がないんだから。(太郎)

「ってば」「ったら」が陳述性のある表現を受ける場合は、引用句の話者は明らかだが、体言の場合には話者は特定されない。というより、その場で誰かが述べたこと、場合によってはその誰かは話し手自身のこともあるだろうが、その発話を受けて、「・・・さんが今ちょうど話したXは」という表現内容になり、「って」「ったら」「ってば」で受ける部分全体が文の主題の働きをする。森重敏(1965)は「場に依存する度が高いにもかかわらず、主語が個別者から全体者への転換の質的な飛躍性を高くもつ」動詞として「という」をあげている*1が、まさにその性格の変化があらわれている。この表現形式は、すでにその場に出された発話内容からあることがらを選び、それを新たな話題として次の文に取りこむ点がポイントである。この場合、「って」「ってば」「ったら」の前に来る語は必ずしも体言である必要はない。

(22) そんなことしたら命にかかわるよ。

－命にかかわるったら、こっちの方がもっとあぶない。

こうした例では、用言の言い切り形であっても陳述性はない。結局、「ったら」「ってば」の前が陳述形で誰が発話しているか明らかな直接話法の場合の他は、「ったら」「ってば」の機能は話題提示にあると言える。

1．2　話題提示の「ってば」「ったら」

森田・松木(1989)は、係り助詞の働きをする複合辞を集めて分類している。その中で主題化を示すものとして次のような表現があげられている*2。

1　とは／というのは
2　といえば／というと／といったら
3　とくると／ときたら
4　となると／となれば／になると／となっては
5　に至ると／に至っては
6　かといえば／かというと
7　としては／にしてみては／にしてみれば／としても／にしても／にしたって／にしろ
8　としては／にしては
9　にしても／にしたって／としても

＊1　森重敏(1965) 130頁

＊2　森田・松木(1989)47頁。ただし、「ときては」「とくれば」がない等、補うべきものがあるように思われる。

10　といっても

11　といえども

12　には／におかれましては

森田・松木は、この中の「といえば」「といったら」の用例として次のような文をあげている。

(23) 終わるっていえば、相撲もあしたで終わりですね。

(24) 大木が何本となく並んで、そのすきますきまをまた大きな竹やぶでふさいでいたのだから、日の目を拝む時間と言ったら、一日のうちにおそらくただの一刻もなかったのだろう。

ここにあげられている例は、先に述べた「すでにその場に出された発話内容からあることがらを選び、それを新たな話題として次の文に取りこむもの」で、森田・松木ではこうした例を主題化を表す複合辞と考えていることがわかる。

先の一覧表で、森田・松木は縮約形はあげていないけれども、「ば」形と「ては」形には次のような縮約形がある。

といえば	とくれば	となれば	とすれば	にしてみれば
といやあ	とくりゃあ	となりゃあ	とすりゃあ	にしてみりゃあ

といっては	ときては	となっては	としては	にしてみては
といっちゃあ	ときちゃあ	となっちゃあ	としちゃあ	にしてみちゃあ

これらの縮約形は使う年齢、地域等が限られ、必ずしも一般的とは言えないが、動詞が変わってもそのすべての動詞に共通する規則性を持つ。一方、「と言えば」「と言ったら」には「ってば、ったら」という縮約形があるわけだが、この変化は、動詞が「言う」の場合に限られている。この系列には他に「って」「ったり」等があり、全体が一つの活用体系をなしながら、独自に幅広い使われ方をする[*3]。本稿は、その中の特に「ってば」「ったら」を取り扱っていることになる。

＊3　三枝 (1997) は、「ってば」「ったら」を次の表に見るように「って」の異形態と考える。

動名詞	行くって
与件	行くってば
条件	行くったら
選択	行くったり
推量・過去	行くったろう
直説・過去	行くった

2 提題助詞の働きを持つ「ってば」「ったら」

2．1 定義の「ってば」「ったら」

1．2で「ったら」「ってば」が、その前に来る語に陳述性がない場合には、話題提示の働きをすることを見た。ところで次の二つの文をくらべてみよう。

(25) a おりるったら、斉藤さんは反対した。

b おりるったら、やめることだ。

(26) a 原子爆弾ったら、きのこ雲が頭に浮かぶ。

b 原子爆弾ったら、危険なものだ。

a文、b文とも主題を表す。しかし、a文では話し手は必ずしも特定されないけれども((29)a文の場合)「言う」の条件の意味が残っている。それは、「ったら」の後件が独立した文であることで明らかだ。一方、b文では、「ったら」と後件との関係が主題と述語の関係にあり、全体で単文をなしている。こうした「ったら」は、後ろに定義付け、説明の述語が来て、「ったら」の前の語の定義、説明を表す。この場合には「ったら」を「とは」もしくは「は」で置き換えることができる。次もこうした例である。

(27) 田中ったらあの総務の田中か。

(28) 一つ拾いにそろそろあるく格好ったら、ほんとに見られたもんじゃなかったわ（さぶ）

(29) 明日じゃないか、21日ったら。（水の旅人）

森田・松木のあげる例は、確かに主題を表すものだが、ここで取り上げた単文を作る「ったら」は、さらに動詞性が薄れ、助詞化が進んでいると言える。

2．2 非難の「ってば」「ったら」

ところが、「ってば」「ったら」を含む文が単文であっても、その前の語が、話の場に存在するものの場合には、定義付けの意味はなくなる。人称代名詞の場合が圧倒的に多いが、「ったら」「ってば」が受ける語は、①第三者、および、話の場に存在する具体物、②話し手自身、③聞き手自身、の三つに分けられる。

①前に来る語が第三者および具体物をさす場合

(30) うちのパパったら、仕事が終わって家に帰って来て、夕御飯の用意が出来ていないとすごく怒るの。（朝日）

(31) あの人ったら、しつこいんだからね、全く！（女社長）

(32) そいつったら大酒のみで、乱暴者で・・・（死んでも）

(33) 克己ってば、すごく不機嫌な顔してる。（会えて）

(34) あのアパートったら、ネオンがついてる。

②前に来る語が話し手をさす場合

(35) そう言った後、母は口に手をあててふふふ、と笑った。「私ったら詩人ね。」(つぐみ)

(36) でも、私が悲しんでいるのを見ていた父が、私の誕生日に、柴犬の子犬を買ってきてくれて、そうしたら、私ったら、すっかり喜んでしまって。(病理)

③前に来る語が聞き手をさす場合

(37)「珠美ったら、無茶言わないでよ」と夕見子がたしなめた。(三姉妹)

(38)「姉さんてばいつもあたしのまねばかりするのね、じゃましないでよ」(さぶ)

(39) 依子ってば、そんなにあきれなくったっていいじゃない(会えて)

この用法では次のように後件がない用例もある。

(40) 姉がまた「そのちゃんったら」とたしなめ、徳兵衛は無関心に手を振って、「うるさい、すきなようにしろ」と云った。(さぶ)

(41) 兄「石津の奴ならやりかねない」
妹「お兄さんったら」(三毛)

(42) 直子「特売のシャンパンにしちゃ、いい音してたじゃない」
父「なんだ、特売か」
母「やあねえ、直子ったら・・・」(冬)

いずれの場合も後件は、人の性格付け、事物の状態を言い表す状態述語となっている。①~③の中で、①②は、「って」への言い換えが可能で、③では言い換えができない。このことは、①②の「ったら」がまだ「と言う」の働きを保っていることを示している。②の話し手自身を指す一人称の場合は、自己を客観化している感じが示される。しかし、③の用法は、現に目の前に存在する人に直接呼びかけているわけだから、「言う」の意味はなくなっている。全体に、佐久間(1956)[*4]が言う「あきれたような物言い」、非難の意味合いが加わる。益岡・田窪(1989)は、「ったら」の前に人称が来る場合を用例としてあげ、「行動の観察をもとにして、その評価を与える場合に用いられる。」[*5]と述べている。

現に目の前に存在する人に呼びかける場合には、これと特定されるので、本来概念を受ける「と」の役割は消える。しかし、「言う」の条件形があることで、あえてそのことを話題にするという“ことあげする”響きがあり、また、条件形によって対立項の存在が前提とされる。そこで、その人の行動、性格やものの様子に対する驚きが感じられる。たしかに、マイナス評価の用法が多いが、次のようにプラス評価の文ができないわけではない。

＊4 佐久間(1956) 250頁

＊5 益岡・田窪(1989) 134頁

(43) 君ったらやさしいんだね。

(44) 田中さんったらすてき！

プラス評価の文の場合は、対象が知っている人であっても、その知らなかった側面について語る場合が多いようだ。人は、すでにわかっているプラス面をことあらためて主張することはせず、むしろ、今まで知らなかったプラス面を見て、それを表現する方が普通だからだろう。

3 提題の「は」「なら」「って」との比較

益岡・田窪（1989）は、提題助詞として「は、なら、ったら、って等」をあげている。ここで、それらの語の違いを考えたい。

「は」は、代表的な提題の助詞で、もっとも幅広く使える。主格だけでなく「が」「の」「に」「を」の代わりにも使え、述部は、状態述語も動態述語も可能である。

「なら」について、鈴木（1992）は、「ナラ」が通常の仮定条件法ではなく、単独の体言について単文を形成する場合として次の二つの条件、(1)「ナラ」が主語を取らない。（主語が省略されているのではない）、(2)ナラをハに置き換えるか、または、ナラを消去することによって、もとの文と近い意味の単文にすることができる、を挙げている。「乗るなら飲むな」は、「あなたが自動車に乗るなら、あなたは酒を飲むな」と言い換えることができるので、提題とはならない[*6]。上の二つの条件を満たす文として、たとえば「酒なら灘の生一本」「買い物ならスーパーへ行きました。」という文をあげている。「なら」も動態述語が可能で、また、「鈴木さんならできるだろう」と仮定、可能形とも呼応する。また、鈴木は、次のような用例から、対立する事態が想定できない場合には、「なら」が使えない点を指摘している。

(45) これ｛は/*なら｝驚いた。

(46) お前｛は/*なら｝帰れ。

(47) あの人｛は/*なら｝誰ですか。

すなわち、「なら」は、三上の言う「条件付きの題目」であり、「は」は「無条件の題目」と言える[*7]。

次に、「って」「ったら」「ってば」を見てみよう。まず、「って」「ったら」「ってば」に共通するのは、いずれも引用の「と」を含む点だ。一般に、用言が「と言う」という引用句内で用いられるとき、先に 1.1 で見たような直接話法の場合をのぞき、その用言には叙述性がなくなり、概念しか表さない。「彼は北海道へ行きたいと言った。」や「彼はき

＊6 鈴木（1992）4, 5 頁

＊7 三上（1960）165 頁

っと勝つと言った。」という文において、引用されている用言には叙述性があるが、引用の「と」があることで文全体の中ではその叙述が人の頭の中で想定されたものに変わる。ヤコブソン(1984)は、言語の機能の一つにメタ言語的機能をあげている。それによれば、「言語そのものの外にある事象について語る」「対象言語」に対して「メタ言語」は、「言語コード自体について語るための言語」を言う[*8]。引用の「と」は叙述をメタ言語化する働きを持っていると言える。

次にそれぞれの違いをみてみよう。「って」は、概念を受けるものだから、述部に状態述語が来て、主題の属性、性質を述べたり、定義付け、説明の働きを持つ使い方が普通だ。

(48) 田中君 {は/*って} 今ご飯を食べている。

用例(48)のように、「って」に現象文の述語は来にくい。また、「ってば」「ったら」が主格しか受けないのに対して、「って」は、「私は牛肉って食べない。」と主格以外もとることが可能だ。次は、ヤコブソンがメタ言語の例としてあげているものである[*9]。

(49)「あの二回生はダブったんだ。」「でも〈ダブる〉って何?」「〈ダブる〉というのは留年することだよ。〈留年〉ていうのは〈進級試験にしくじること〉なんだ。」「それで、〈二回生〉というのは何だい」、学生ことばにうとい相手はさらに聞き返す。「〈二回生〉とは〈二年生〉のこと(あるいは意味)だよ。」

「対象言語」の例であるはじめの例をのぞいて、「メタ言語」文では「って」が使われることがわかる。藤村(1993)は、このヤコブソンの例で「は」との置き換えが可能かどうかをみて、質問の文は「は」に置き換えることができず、答えの方の文も不可能ではないが不自然なことを指摘している。ところで、このヤコブソンの例は、「は」には置き換えにくいが、次のように「ったら」には置き換えが可能だ。

(49)'「でも〈ダブる〉ったら何?」「〈ダブる〉ったら留年することだよ。〈留年〉ったら〈進級試験にしくじること〉なんだ。」

このことから「って」「ったら」がいずれもメタ言語表現として使われていることがわかる。しかし、「って」が定義付け、説明の働きで初出文に現れることがあるのに対して、同じく定義付け、説明の「ったら」は、前の発話を受けるのが自然だ。これは、「ったら」の持つ条件形によって、いろいろある中からそのことがらを選ぶという要素が加わるためと考えられる。

定義付け、説明の用法では、述語は当然、状態述語になるが、先に見たように「ってば」「ったら」が人称代名詞を受ける場合は、動態述語が可能である。

---

*8 ヤコブソン(1984)108頁

*9 ヤコブソン(1984)109頁

(50)　田中君｛は／*って／ったら｝、今ご飯を食べている。

「ったら」「ってば」は、定義付け、説明の働きではメタ言語である「って」あるいは「とは」と共通するが、一方、条件という点では「なら」と共通する。次は、益岡・田窪（1989）が「なら」の例としてあげているものである*10。

(51) 甲：田中さん見なかったかい。

乙：田中さんなら、図書館で勉強してたよ。

この乙文は、「ったら」に置き換えることができる。ただし、この甲文に対する直接の応答にはならず、たとえば、次のような文脈が必要だ。

(51') 田中さんは勉強嫌いなんだって。

ーでも田中さん｛ったら／ってば｝、きのう図書館で勉強してたよ。

益岡・田窪(1989) は、「なら」について、「相手が持ち出した話題を主題として情報を与える場合に用いられる。」と述べている*10。その点は、「ったら」「ってば」も同じだが、「ったら」「ってば」にはそれに加えてことあげする強い響きがある。

次の例に見るように、前件と後件の意味関係からも、提示の「は」「って」と異なる「なら」「ったら」の共通性がみてとれる。

(52)a　松｛は／って／なら／ったら／？ってば｝木だ。

b　木｛＊は／＊って／なら／ったら／ってば｝松だ。

題目と述部の関係は、説明関係にあるから、b 文のように題目の外延が述部に来ることはない。藤村（1993）は、同様のことを「って」についてだが、「普通名詞と一対一のかんけいにあるのは特定のモノではなく、その記号で呼ばれるモノの集合である。（普通名詞の）記号内容は、その名で呼ばれるカテゴリーの特性に等しく、個々のモノの性質に等しいとは限らない」と述べている*11。しかし、「は」「って」以外では、この「木は松だ」式の表現が可能である。ただし、「木は松だ。」という表現は、「魚は鯛だ。」のようにいいものをあげる文としては可能で、また、その対比文として「木は松、花は菊だ」という表現もある。

ところで、「ったら」「ってば」が現に目の前にいる人を受ける場合は、「てば」「ったら」がなくても文は成立する。

(53) 珠美｛ったら／ってば／φ｝、無理言わないでよ。

こうした無助詞の場合は、格を問題にしない、よびかけの働きと見ることができる。それが「ったら」「てば」と異なるのは、「ったら」「ってば」のように、わざわざそれを取り上げて話すのだということあげの意味合いを含まない点だろう。

＊１０　益岡・田窪（1989）134 頁

＊１１　藤村（1993）53 頁

4　終助詞の働きを持つ「ってば」「ったら」

「ってば」「ったら」には終助詞用法がある。これは先にあげた同語反復文の後件がないものと考えられる。それは、「ってば」「ったら」の前が陳述文であり、また提題助詞の用法とは異なり、意味的には「と言えば」「と言ったら」に戻して前件と同じ表現の後件を付け加えることができるからである。これを終助詞用法と考えるのは、文末でイントネーションが下降し、条件形にもはや活用形として文を接続する働きがなく、意味的にも文の叙述内容に関わっていないからである。この「ってば」「ったら」の用法は、平叙文と命令文の場合に分けることができる。

4．1　平叙文の場合

この例として次のような用例があげられる。

(54) a　「つまらない展望を語ってるヒマがあったら、女子大生を連れてきてみろ、この辺には全くいないんだぞ、そんなもん」

b　「陽子ちゃんがいるじゃない」

a　「ちがうったら、もっとバリバリの奴。あたしなんか、ＴＶでしか見たことないんだぞ（つぐみ)。

(55) a　「ねえ、ガラス、あぶない」

b　「大丈夫だよ」

a　「あぶないったら」（となりの女)

(56) a　「早く来ないと、ガードマンに見つかるぜ」

b　「わかってるってば！」（三姉妹)

(57) a　「・・今度の嘘はちょっと心動かされたわ」

b　「ほんとだってば。」（月は)

これらの用法は、いずれも初出文ではなく、その前の発話を受けている。意味的には「抗弁」を表す。

4．2　命令文の場合

(58) ふざけないでったら。（死んでも)

(59)「よせったら、さぶ」と栄二が云った。（さぶ)

(60) まあお待ちよ、乱暴だねえあにさんは、待ってったら。（季節)

(61) おあがんなさいってば、寒いわよそんなところに立ってちゃあ（さぶ)

(62) おばあちゃん、およしなさいってば（寺内)

(63) ねえ、何をたのまれなすったんですったら（待ち伏せ)

最後の用例（63）は、疑問文であって、命令というには特殊だが、答えを要求している点

で命令に含める。これらの用法も初出文には現れにくい。もともと命令文で、その機能も「命令」にあるが命令のだめ押しの感じがする。

5．まとめ

本稿では、三枝（1997）で十分検討し得なかった「ってば」「ったら」の用法を語用論の立場から論じた。三枝（1997）で論じたように、筆者は「ってば」「ったら」を「って」の活用形と考える。これを一つのたての体系とすると、「って」「ったら」「ってば」には、文中に現れる位置によって、直接話法、提題助詞、終助詞というよこのひろがりも併せ持つ。「ってば」「ったら」が主題の働きをするのは、形態の上からは、条件形というものがそもそも提題助詞の枠に相当しているからである。しかし、同時に、その用法は一文の範囲には収まらず、文の外の現実世界をも視野に入れてみる必要があることがわかる。

【参考文献】

三枝令子（1993）「動詞・形容詞の名詞的ふるまい」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 12』情報処理振興事業協会技術センター
－－－－（1997）「「って」の体系」『言語文化』34巻　一橋大学語学研究室
佐久間鼎（1956）『現代日本語法の研究』くろしお出版
鈴木義和（1992）「提題のナラとその周辺」『園田学園女子大学論文集』26号
丸山直子（1996）「助詞の脱落現象」『言語』Vol.25
益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
三上　章（1960）『象は鼻が長い』くろしお出版
森重　敏（1965）『日本文法－主語と述語－』武蔵野書院
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク
藤村逸子（1993）「わからないコトバ、わからないモノ－「って」の用法をめぐって－」『名古屋大学言語文化部』
R．ヤコブソン、池上嘉彦、山中桂一訳（1984）「言語学の問題としてのメタ言語」『言語とメタ言語』勁草書房

例文出典

会えて『会えてよかったね』石井ゆうみ、三毛『三毛猫ホームズの怪談』／三姉妹『三姉妹探偵団3』／女社長『女社長に乾杯』赤川次郎、太郎『太郎物語高校編』曽野綾子、冬『冬の運動会』／蛇蠍『蛇蠍のごとく』／寺内『寺内貫太郎一家』向田邦子、さぶ『さぶ』／季節『季節のない町』山本周五郎、待ち伏せ『待ち伏せ』／梅安『梅安料理ごよみ』池波正太郎、病理『豊かさの精神病理』大平健、龍『龍は眠る』宮部みゆき、死んでも『死んでもいい』石井隆（92年鑑代表シナリオ集）、水の旅人『水の旅人侍 KIDS』末谷真澄（93年鑑代表シナリオ集）、つぐみ『つぐみ』吉本ばなな、日経：日本経済新聞、朝日：朝日新聞